

特別 I 分科会「時宜に応じた課題」

(報告者) 大田市教頭会所属

○発表の概要

この分科会のテーマは、
誰一人取り残さず、個々の可能性を最大限に引き出す教育の推進に向けた教頭の役割
—個別最適な学びと協働的な学びの日常化を図るための教育の DX 化に向けて—
という表題で、東京学芸大学教育学部教授 高橋 純 氏からお話をいただきました。
講演の中では、これまで以上に先の見通せない将来の中で、これからの教育では、生涯にわたって能動的に学び続ける力が大切であり、そのためには、他者との協働を図りながら一人一人の自己実現をめざす教育が大切である。そのツールとして ICT の活用は不可欠であるという話の中で、富山市の学校の取組などを見せていただきました。その中では、画面上で個々の学習過程を共有することで個々の思考も深まり、他者の意見も聞きながらまとめていく姿があり、そのことを繰り返すことでどんどんまとめる文字量がふえていっている様子が見られました。

とにかく今までの一斉指導から脱却し、複線型の授業を進めていくことが必要であるということでした。複線型の授業とは①課題・活動を確認する。②協働を自己決定し、他者の意見や考えを参考にしながら何度もインプットとアウトプットを繰り返す(この中で教師は適宜把握と指導を行う)。③課題を提出する。という流れです。この流れをスムーズに進めるためには、もちろん教師側が学習課題や学習過程、学習形態を前もって考えておくことが前提である。実際に見させていただいた学校の映像では一つの授業の中で個別に取り組んでいる児童、友達と意見を交換し合っている児童、一斉に集まりチェックを受けている児童が混在している中でも誰もが目的をもって取り組んでいる姿があり感心しました。このような取組はどの学年でもすぐにできるわけではないので小学校であれば、低学年では漢字・計算などの基礎基本 学習習慣などの学ぶ姿勢づくり、中学年では学習過程、見方・考え方、協働等の基礎 自走するための基礎づくり、高学年では子供一人一人の問題解決活動 高次の資質・能力の育成を図っていき徐々に複線型授業に移行していくような流れを作っていかなければいけない。とのことでした。とにかく教師自身が行動し、日々自己更新をして前に進んでいくことが大切だということでした。

○質疑及び協議

グループ協議では、北海道から福岡までの 5 名の教頭先生方と午前と午後の 2 回に分けて協議を行いました。校種も様々で盲学校にお勤めの教頭先生については、ワードやエクセルでは読み上げ機能を使っているという話があったり、他の方については故障機の対応も教頭の仕事だったり、とにかく仕事が多すぎて GIGA スクールの波に乗っていけないといった意見もあったりした。また、島根県でも同様であるが、同じ県の中でも使用している端末の種類が違ってなかなか共有することが難しいという意見もありました。また、教員間でも ICT の使用について温度差があるので、自分が学んできたことを積極的に取り入れ少しずつ学んでいってもらっているという学校もありました。その他様々な意見がありましたが、教頭自身が学びを止めずに日々自己研鑽をしていかなければならないと感じました。そして、メディア教育担当者とも連携を取りながらチームでより効果的な授業について考えていければと思いました。

1. 趣旨

社会全体で働き手や人とのつながりにもデジタルネットワークが多様化されるなど、「電子化」「最適化」「DX加速の必要性」は顕著となっている。また、多様性と包摂性という言葉も今まで以上に認識され、見聞きするようになった。こうした中、新しい時代の学校教育の実現に向けては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが重要である。そのために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の日常化を図る教育のDX化が求められている。

2. 講演

「誰一人取り残さず、個々の可能性を最大限に引き出す教育の推進に向けた教頭の役割
—個別最適な学びと協働的な学びの日常化を図るための教育のDX化に向けて—

講師 東京学芸大学教育学部・教授 高橋 純 氏

○講演の概要

- ・見た目の変化ならハウツーでも伝わるが、考え方や概念の変化を起こすには、理念や本質から追究する。言葉で理解することは不可能で、体験と試行錯誤が重要となる。
- ・クラウドを活用することで、他者の学習過程を共有することで、他者の意見を聴き、理解・解釈しながら、自分の意見をまとめ表現するような学習を、何度も繰り返すことで、従来にない量の文章量を記述できるようになっている。
- ・クラウドの活用により、授業研究の在り方も変化し、指導案なども直前まで変更が可能となったり、タスク管理型の業務遂行でより効率的に仕事がこなせるようになりたりする。
- ・人類の知は、言葉で継承され、増加の一途をたどっている。知を継承・発展させる方法も変化しているが、人は分かりやすさ使いやすさに流される。
- ・端末+問題解決的な活動では、個別も協働も一斉同時に起こる。結果として多様な子どもが学びやすいスタイル（複線型）となる。

3. 協議

全国各地から集まった教頭と、5・6人のグループをつくり、各校や各市町におけるICTに係る情報交換を行った。授業DXだけでなく、校務DXに係る現状としては、膨大な教頭業務の中で、どのように進めていったら良いのかという視点での話し合いが中心となった。教育委員会と連携しながら、効果的な方法について共有し、各校の実情に合わせて取り組んでいきたい。

特別Ⅱ分科会 「少子高齢化の地域におけるチーム学校づくり

—中山間地域における地域とともに取り組む学校づくり—

報告書 松江市教頭会所属

1. 講演1 「中山間地域の資源を生かした学校づくり—多様な体験活動を通して—」

講師 川上確也氏

○講演の概要

- ・高知県は中山間地域93% 森林率1位 人口の一極集中 消滅自治体ができる可能性もある県である。
- ・子どもは地域とのかかわりの中で育つ。(小学校時代の思い出は学校外のことが多い)
- ・高知県版地域学校協働本部を認定している。(学習支援・部活動・地域問題解決型学習・環境整備等) →学習等の効果が得られた。
- ・子どもの頃の自然体験が多ければ多いほど現在の人間関係能力も高まる。探求力、自己肯定感、道徳観・正義感等も高まる。
- ・読み聞かせは心の脳を育む。(他人を思いやる心、大脳辺縁系を発達させる)
- ・目指す若者は志をもつ若者である。

<いの町立川内小学校の実践>

●自由校区になった時に来なくなる学校を作ろう。

読む、書く(川内ノート)、話す(朝の音読、暗唱) 活動の充実

海外の学校と児童が英語で交流(ビデオレター)

1・2年生も外国語活動

タブレットを活用した学習。校内の英語環境の整備

英語教育

言語教育の充実

小さな学校で大きな学び(◎言葉の力を育てる。◎豊かな自然と地域の支えが魅力)

○協議まとめ

- ・地域コーディネーターの役割やその時の教員・管理職の力量が必要なのではないか。
- ・教員の年齢構成がいびつ。教員は任期が短くて地域に興味をもちにくい。また、児童生徒の支援に時間を割くことが必要で、若手教員の人材育成に時間がもてない。→夏休みは地域を伝えるチャンスである。計画的に進めることが必要。
- ・地域の人によくしてもらったという経験が地域に戻るという気持ちをもちやすい。→志

2. 講演2 「熱き志は土佐の山間より出ず」

講師 清原泰治氏

○講演の概要

- ・高知県立大学での取り組み(大学生が地域で学ぶことの意義→地域と大学が連携することでどんな教育的効果が期待できるか。→地域の声聴いて学生達がそれを実現できるように、地域の「おんちゃん、おばちゃん達」が支えてくれる。←(伴走型の「実務家教員」)
- ・「城学共生」地域と大学が共に生きていくための協働関係。地域の皆様は実務家教員。